



その木はいつもそこにあります。

そしていつも一人ぼっち。誰も友達がいません。

彼は一日中、目につくもの全ての文句を言って過ごします。

お陰でその木には誰も寄り付きません。

鳥もとまらず、虫さえも。

ある日のこと。

いつものように夜が明け、太陽が顔を出します。

世界は新しい一日を迎えます。

ところが彼は不満です。

夜はよるで暗いといっは文句を言うくせに、朝になると明るい、鳥たちがうるさいと文句を言い出すのです。

その日は珍しいことに一羽の鳥がその木を訪れました。

珍しい色をしたその鳥は、鮮やかな緑の茂った木の枝にとまると、静かにでも美しく透明な声で鳴きだしました。

その音色はまるでやさしい風のささやきのように、柔らかな木漏れ日のように、耳に心地よく、思わず耳にした人たちが立ち止まるほどでした。

その鳥はそっと鳴き続けます。まるで誰かにささやきかけるように。

ところが、木はその音色が嫌でたまりません。

「あぁうるさい！うるさい！私は昼寝を楽しんでいたのに、とんだ邪魔が入ったものだ。さっさとどこかに消えてくれ！」

いつも大抵このように、珍しく遠方などから来客があると、木は決まって文句をいい、枝や葉を忙しく揺らします。

すると来客たちは居心地が悪くなり、すぐに飛び去ってしまうのです。

しかしいくら木が文句を言っても、その鳥は一向に鳴くのを止めません。

その鳥はその日一日中それはそれは美しい音色で音楽を奏で続けました。

翌日になると、その美しい音色を聞くために、いろいろな来客が木を訪れるようになります。

まずは朝一番に美しい鳴き声を聞きつけて鳥たちが集まってきました。

鮮やかな新緑の葉に覆われた枝々にとまってはそれぞれに鳴き始め、いつの間にかそれはそれは美しいハーモニーが奏でられています。

今度はそれを聞きつけて人々がその木に集まってきました。

彼らは鳥たちの美しい音色に耳を傾け、ある人は木のどっしりとした太い幹の根元に腰を下ろし、またある人は鳥たちの邪魔をしないようにそっと木の枝に登って、

またほかの人たちは木陰にブランケットを広げて、それぞれに美しい鳥たちの演奏を楽しみます

。

ところが木はそれが我慢なりません。

「ああ早く一人になりたい。みんなどこかへいなくなればいいのに・・・」

一日中ぶつぶつぶつぶつそうって過ごします。

そんな日が数日続きました。

その日も木は文句を言います。

「ああ子供たちがうるさい。枝に登られたら美しい葉が落ち、枝が曲がってしまう。鳥たちは虫を食べそのついでに葉や枝、幹に傷をつける。みんないなくなってしまうればいい。動物たちまで寄ってきて・・・ああどうして私はこうも美しい木なのだろう。誰も寄り付かないような醜い木になればいいのに・・・」

そしてその夜。

その夜は激しい風が吹きすさび、やがて雨が大地を打ちつけ、荒れ狂う嵐となりました。

嵐は木を揺らし、葉を吹き飛ばしました。

その木に止まっていた鳥たちは飛び去り、動物たちも去ってゆきました。

ところが一羽だけその木に残った鳥がいます。

あの美しい鳴き声で皆を楽しませた鳥です。

彼には飛べない理由がありました。翼が折れていたのです。

木は吹きすさぶ雨と風に体を弄ばれながら必死で抵抗していました。

その鳥がそこにいることさえ気がつきませんでした。

やがて突風が木を襲います。

枝はもげ、鳥は飛ばされそうになります。

そのときです。

木は残った最後の枝を伸ばし鳥を捕まえます。

鳥は何か枝に捕まり、木は最後の枝にある葉っぱで鳥を包み込みます。

そうして2人は嵐を耐え忍びます。

ところが天はそんな2人の葛藤には見向きもせず、無常にも大きな雷が木に落ちます。

木は傷ついた鳥だけは守ろうと必死で近くの柔らかな芝生に葉で包んだ鳥を落とします。雷が木に落ちるその瞬間に。

木は全ての雷を一身に受け、焼け焦げて葉も枝も幹も全てを失います。

嵐が去って、また世界は新しい朝を迎えます。

ところが・・・

木はもう朝が来たからといって文句を言いません。

枝や葉を揺らすこともありません。

黒焦げのみすぼらしい木はただ黙ってそこにあります。

もう誰も寄り付きません。

しばらくして、人々がやってきました。

真っ黒にこげた木をみて人々は言います。

「この木はもう駄目だ。切り倒してしまおう。」

とうとう木は切り倒されることになりました。

木が切り倒されるというその日、木を切るために人々が集まったその先に、一羽の珍しい鳥が飛んできました。

鳥は焦げて枝も葉もない木に音もなくそっととまると、それはそれは美しい声で鳴き出しました

それは人々がかつて楽しんだ音色でした。美しく透明でそしてどこか悲しいその音色に人々はまた心を奪われます。

しばらくすると、今度はその音色につられてたくさんの鳥たちが集まってきました。鳥たちは焦げて枝も葉もない木にとまって、それぞれに美しいハーモニーを奏でます。その音色はいつしか音楽となって人々の心を溶かしました。

それからというもの、何も言わずただ静かにそこに佇む焦げて枝も葉もない木には毎日絶えることなく多くの鳥たちが集まるようになりました。

やがて動物や人間も以前のように木のまわりに集まるようになりました。

そしてその中心にはいつもあの美しく透明な鳴き声の鳥がいます。

鳥は木の中心でやさしくそっと美しい声で鳴き続けます。

まるで木に話しかけるように。

またいつものように夜が明け、太陽が顔を出します。

世界は新しい一日を迎えます。

木は朝の陽を受けて、いつものように黙って来客を迎えます。

焦げて枝も葉もありませんが、それでも木には毎日たくさんの来客が訪れます。

そしてその中心にはいつもあの美しく透明な鳴き声の鳥がいます。

鳥は木の中心でやさしくそっと美しい声で鳴き続けます。

まるで木に話しかけるように。

太陽の光がみんなに降り注ぎます。

その先には焦げた木の焼け落ちた枝の先・・・

・・・小さな小さな小さな若葉が光っています。